X教授の作った世界

ヤマダヒフミ

「世界首長者会議」と銘打たれたその会議には、ざっと百五十人ほどの人間が集っていた。その百五十人は映画などでよくあるように、巨大な楕円形の机にそれぞれが顔を向かい合わせて座っていた。それぞれの出席者の前には、ペットボトルの飲み物とタッチパネル式のモニターが用意されていた。中には、通訳してもらうためにインカムを付けている出席者も大勢見受けられた。

彼らは世界中から集められた、トップクラスの要人ーーーつまり、先進国の首脳や、最先端科学、遺伝子工学、電子工学や宇宙開発の研究者、また世界でもトップを走る大企業の社長や会長達の集まりであった。彼らは皆一様に真剣な顔をしてモニターを見たり、眉間の皺を深く刻ませて虚空を睨んだりしていた。

これから世界全体の趨勢、その帰結に関わる重要な会議が始まるという触れ込みで始まったこの会議ーーーだが、その出席者達のほとんどが、その会議で実際に何が起こるか、という点は殆ど何も知らなかった。それでも、彼らが、こうしてこの会議に出席してきたのは、ある、世界全体に対してきわめて重大な権力を保有する一人の男が、世界全体に呼びかけたからであった。

その男とは、その男の名前も姿も一度も誰も見た事がないにも関わらず、世界で最も有名だという不思議な男だった。その男が有名になったきっかけは、あるウェブサイト上での一つの「予知」だった。彼は2025年に中国で大地震が起こり、多数の死傷者が出て多くの建物が崩壊し、また、当時最も高いビルディングであった「エクストラ・タワー」が半壊する事を見事に予知したのだった。そしてその「エクストラ・タワー」が実際に傾いた姿というのは、男がそのサイトで描いて見せた簡単なラフ・スケッチに酷似していたのだった。この予言により、その「男」の運営するウェブサイトは一気に世界中で有名になった。だが、一部の真摯で真面目な人間からはまだまだ眉唾ものとして疑われていて、そのサイトは、オカルトに分類されるのが常だった。
だが、その三年後、同サイト「プロフェッサーの未来世界」は別の予言を的中させた。それが2028年の「全世界首都圏スタジアム同時破壊テロ」である。「プロフェッサー」はそのサイト内において、犯行の一ヶ月程前に、突如としてそれまで放置されていた「未来世界」のサイトを更新させ、「全世界首都圏スタジアム同時テロ」の詳細な予告をしたのだった。・・・だが、
実際、その「全世界首都圏スタジアム同時テロ」の予知は一部外れていた。それは、実際に行われたスタジアムの場所と、一部は異なる箇所が予告されていたのだった・・・。だが、そのテロ事件の実相が日が経って分かるにつれ、その予知のズレの正体が解明された。・・大規模な犯人グループは、犯行の一ヶ月前に更新されたそのサイトの予知の詳細を見て、一部の首都部のテロの対象を変更したのだった。そして実際、彼ら犯行グループが元々、プロフェッサー(これから「教授」と呼ぼう)の予知の前に計画していた場所は全て、教授の予知と全てぴったりと合致していた。

これらの事によって、「プロフェッサーの未来世界」と、その首謀者と目される教授の名は一気に高まり、世界的名声を得る事となった。・・・そして世界はもはや、「プロフェッサーの未来世界」と「教授」をもはや、オカルト的人物と言う事は一切なくなった。・・そして、そのサイトや教授に対して様々な憶測や説が流れ(フィンランドの祈祷師の末裔である、などなど)、また、そのサイトと教授に対しては、早く新しい予知をしてもらって、世界を災害や突発する大きな

犯罪から守ってもらいたい、という半ば脅迫と願いを込めた意見が世界中から寄せられた。・・だが、その予告サイト「プロフェッサーの未来世界」と教授は、その「全世界首都圏スタジアム同時テロ」の予知以来、急に黙り込み、そのサイトの更新も一切されなかった。

この行動は謎を呼び、更に世界に様々な憶測や意見や感情を誘発させるきっかけとなったのだったが、更に謎であった事は、そのサイトがどこから発信されているものなのか?・・・というのが、突き止めようがなかった、または突き止める事ができなかった、という点にある。・・・それは、もはや人々に手出しできない隔離された独裁国家の内部から発信されているに違いない、というのが世界の大方の意見だったが、実際、その確たる証拠もどこにも見つからず、そのサイトの発信源やそのサイトの更新者は世界がどうあがいても謎に包まれたまま、という現象に陥った。

そしてサイトと教授は沈黙したまま、そのまま二年が過ぎた。その二年に、少しは、サイトと教授に対する関心は薄れたが、それでも人々の多くの意識の底ではその事に対する拭いがたい印象というものは残っており、まだビビッドな印象を与えていたと言って良かった。(アンダーグラウンドでは、サイトと教授に対する「考察サイト」や様々な憶測記事や意見、関心などが世界中から無数に発信されていた。)

そして今、あの驚異的な予知から二年が過ぎた今、突如として、あの「プロフェッサーの未来世界」のサイトが更新され、その内容は、この作品の冒頭に示された「世界首長者会議」の開催の「要請」(予知ではなく)だったのである。

そのサイトに掲載された「「世界首長者会議」を私は全世界に要請する」の一部を以下に掲げる。

「私こと、プロフェッサーは、全世界に「世界首長者会議」の開催を要請する。これは、全世界に対するとてつもない、かつてこれまで一度もなかった巨大な異変が訪れようとしているからであり、その為の会議である。これは間違いなく、人類至上最も重大な会議となるだろう。

以下に、列席すべき人物と、その場所と日程、その他の要請を記す」

そして以下には出席を要請された百五十名ほどの世界の重要人物と場所、日程、そして「警備は堅固にすべし。それは前年のWHOの四倍の人員と更に、陸海空の兵器も必要となる。空軍戦闘機においてはアメリカ軍とドイツの〇〇を何機ずつ配置する。・・・」など、かなり細かな要請についても書かれていた。

そのメッセージを受けて、全世界は驚愕し、驚嘆した。そして「かつてこれまで一度もなかった巨大な異変」とは何であるのか、「全世界首長者会議」は開くべきかどうか?・・などといった議論がまた、世界中で無数に勃発した。だが、重要な問題は門外漢の議論ではなく、当事者の、その会議への参加を促された人々の手にあった。・・・彼らの多くは既に名誉や名声をオフィシャルな形で得ているその道のエキスパートとして優れた人物ばかりであり、(名は隠れていたものの、「その道」では非常に卓越した能力を持っていると知られている人物も多数入っていた)教授の人を見る目は確かである、という評価もネット上では広く見受けられた。・・・だが、当然

と言っても良いことだが、そのリストに名が載った人物の殆どは、その全く見知らぬ人物からの会議への召集を公式に拒否した。その会議への参加を表明した人物も、リストに上がった人物の中にはいたが、それらの数は両手で折って数えられる程度の数であり、またそうした人々はどちらかといえば、才能と野心に満ちた、まだ年若い人が多かった。

そしてその事は当然、教授の要請した会議の不成立ないし、失敗を意味したのだが、事はそれだけに留まらなかった。・・・ここで再び、「門外漢」が出てくる。彼らは今度は最も重要な任務を帯びて現れてきた。つまり、そうした「首長達」の多くが公式にその得体の知れない会議への不参加を表明するや否や、世界中の非常に多くの人々が、その不参加の姿勢を非難し、またこの会議には絶対参加すべきであるという結論を下したのだった。

その声は世界中に吹き荒れ、あらゆるインターネット上の個人サイトや、掲示板、まだ形骸的に残っていたテレビやラジオ・・・とにかくあらゆるメディアでそれは話題にされ、その会議の重要性とその会議に参加すべきであるという声が至る所から聞こえたのだった。そしてその声は日を経つにつれ次第に膨れ上がり、もはや誰の目にも無視できないものとなっていた。会議の日は刻一刻と近づいている・・・。こうした情勢が「首長達」の重い腰を動かし始めた。彼らは仕方なさそうに、世論の声に背中を押されて、順に少しずつ、会議への参加を徐々に承認していったのだった。

・・・こうして、百五十人の内、百四十六人の出席が、「世界首長会議」の直前において決まった。残りの欠席を決めた四人は、健康上の急な悪化が二人と、どうあっても欠席するという強い断固たる意志で欠席した者が二人、だった。(当然、その二人は世論に大いに叩かれた。その内の一人は、自宅に小さな爆弾を投げ込まれた。(その爆弾は不発に終わったものの。))

さて、こうして、曲がりなりにもようやく会議がほぼ教授の予定通りに開催される事が決定した。もちろん全世界がこの会議の内容を、そしてこの会議で何が起こるのか?という事象に注目し、世界中で討論しつくしていた。そして、ようやくその時は来たのだった。

・・・会議の出席者達が教授の指定により集まった所は、ニューヨークにある新設されたばかりの塔のような二五〇階立てのビルディングの最上部の、収容人数五百人ほどの巨大な会議室だった。そのビルは、２００１年に起きた飛行機をハイジャックしてビルにつっこむという前代未聞のテロのような事件に対しても想定された建築物であり、そのビルの回りに七つの対空ミサイルが常に稼働可能な状態になっており、その防備は、中国が二〇二三年に作った巨大地下シェルターに続いて安全である、というのが専門家達の一致した見解だった。

百五十人近くの人間は、既に整然と座席に付き、会議の始まりを待っていた。人々は、教授の指定した約束の刻限が近づくにつれ、それぞれに一様に心のざわつきを感じたものの、それでも何とか自分を自制して、集団によくあるおしゃべりによるざわつきも見せず、押し黙ってその時を待っていた。

とはいえ、彼らの内心の不安は大きく、それは特に次のような一つの疑問に結集されていたと言って良かった。それは、「教授という人物は実在するのだろうか?そして、その人物がいたとしても、わざわざ本当にこんな所にやってくるのだろうか?・・・こうした「会議」というもの自体、一つの茶番ではないのか?・・・」というものだった。そしてもっと、鋭い考えを持つ人の中には「これは世界の要人達を一気に撲滅させる為のテロリストの仕掛けた罠かもしれない」と推理する人間も中にはいた。・・・だが、例えもしそうだとしても、彼らはやはり、世界全体の大きな世論を無視する事はできなかったために、ここにこうして集まって来ていたのだった。そして、彼らは緊張して、その時ーーー約束の刻限を迎えた。そこで全ての答えが明らかになるはずだった。

その時ーーーそれは約束の丁度午後四時だったのだがーーーが来たと共に、会議室に通じる両開きの扉がゆっくりと開いた。そしてその中から、白衣を纏い、縁の濃い眼鏡をかけ、髪の毛がもじゃもじゃした、へらへらした嫌な雰囲気を醸し出させる男が現れた。男の出現は会議室の中の人々の目を引いた。・・・その男の特長は、その部屋の中では明らかに異質であり、金融会社の重役会議の中に間違って紛れ込んだヒッピーという風の体を感じさせた。

そのふいに訪れた男は、驚いている百五十名ほどの人間に向かって、剽軽な感じでピョコリと頭を一つ下げると、彼らの向かい合っている楕円形のテーブルをなぞるように、会議室の前面に向かって歩いていった。その間、その会議室の中の人々はみんな一様に、警戒すると同時に注視する目線をその男に一心に注ぎかけていた。

やがて、その白衣の男は会議室の一番前ーーー男の隣には大きなモニターが設置されているーーーにたどり着いた。すると男はまたピョコリと頭を一つ下げてから、襟元に付けられたピンマイクを使って、全体に向かって話し始めた。

「みなさん、こんばんわ」

その声はその会議の出席者全員にはっきりと聞こえたものの、その挨拶に答えようとする者は誰一人としていなかった。

「今日はようこそ、よくこの会議にいらっしゃいました。私が、みなさんお待ちかねの「教授」でございます。」

そう言って、自らを教授本人だと名乗った男は、道化染みた芝居で、深々と頭を下げた。その

様子に会場の誰しもが、冷たい沈黙を持って迎えた。一つには、それが本当にあの教授本人であるのかどうかを誰もが疑っていたからであり、またその道化染みた芝居に胡散臭い匂い、人として信頼できない何かを感じたためだった。
「今日はみなさん、本当に、この会議に出席してくださり、ありがとうございます」
そう言って教授は微かにニヤリと笑った。
「みなさんがここに来るまでに紆余曲折があった事は、私はよく知っています。・・・私の方でも、インターネット上で自体の経過を逐一、観察していましたのでね。ですから、みなさん方がここに出席なさるまでの事情はよく知っているわけです・・・。ですが、まあ、みなさんにこうしてご足労頂いて、ありがたい限りでございます」
そう言った教授の口振りは微かに笑ったままであった。・・・そしてその浮ついたような挨拶は誰にも皮肉のように聞こえた。そして誰にとっても、彼のその挨拶は少しも良い印象は与えなかった。
・・そうして、その国会議員の答弁のような堅苦しい言葉を一段落終え、教授が次の言葉を始めようと口を開いた時、会議の前方、即ち、教授に近い席を占めている、初老の、意志の強そうな一人が、だしぬけに立ち上がって、口を開いた。
「あなたは・・・」
と、その初老の男性は襟のピンマイクを使って切り出した。
「あなたは・・・・いや、失礼。私の名は、エルザード重工名誉会長のエルザードというものです・・・」
その名はその専門分野においては誰も名を知らない者はいない、と言ったほどの人物だった。エルザードと名乗る人物は続けた。
「あなたは確かに、自らを、あのネット上で暴露・・・いや、失礼、予知なさった、あの忌まわしい・・・いや、失礼、あの「優れた」サイトの主の「教授」本人である、確かにそう紹介されましたな?そうですな?」
とエルザードという人物は自らの威厳たっぷりの、しっかりした言葉で問いを教授に投げかけた。
「そうですが、何か?」
と教授は、相変わらずフラフラとしたような笑いを口元に浮かべて言った。
「・・・ですがね、我々としては疑っているのですよ。・・・その、あなたが本当にあの世界に多大な迷惑・・・いや、失礼、影響を及ぼした「教授」本人であるかどうかを」
エルザードのその言葉は本当だった。この会議が始まる前、百五十人にも及ぶ人は全員で軽く歓談(顔見知り同士も多かった)している時に、今日来るのが本当に本人であるかどうか実に疑わしいのではないか?・・という話題で盛り上がったのだった。
「我々としては突然こんな妙な・・・いや、失礼、大層な会議に招かれました事、世界の中での主要な人物として招かれた事は真に光栄というか、迷惑というか・・・まあ、そういった次第なのですが、我々にとって、ここにこうしてやってきた以上は」
そう言ってエルザードはその立派な体躯であるその胸をぐっと張った

「あなたが本当に教授本人であるかどうか知る権利が、この会議の出席者として我々には与えられている、とそう考えておる次第なのであります。」
・・その言葉には、その会議の出席者達から拍手が起こっても良さそうな内容ではあったが、実際には拍手は人々の心の中にだけ起こったのであり、実際には鳴らなかった。
「それに関しては」
と「教授」は言葉を引き継いだ。
「私を信用してもらうしかありませんな」
と、居丈高とも言える態度で教授は言った。人々は一瞬、ざわめいた。
「というのも、その訳はこういう事です」
と教授は喋り始めた。
「私がこの会議を企画し、そしてこの会議に出席する事を決めた時、当然、私本人の「本人確認」というものも念頭にありました。その際、私はこうする事と、先方ーーーつまり、私とみなさん方、あるいは世界中との折衝役を努めてくださったアメリカ政府との間で決めたのです。それはつまり、私が、アメリカ政府とメールでやり取りしていのですがーーその際、アメリカ政府と私との間で、とあるパスワードを決めておく。そして私が、このビルに入館する際、そのパスワードを私が伝え、それを照合する事によって、私が教授であると確認するのだ、とね。・・・ちなみに、私とアメリカ政府との間で交わされたやり取りに使われたメールアドレスというものは、私の持っているインターネットサイトに紐付けされた唯一のメールアドレスでしてね。・・そしてこのアドレスは通常の企業の運営から得られるメールアドレスではなく、ちょっと言えないような、ある機密のアドレスであって、そうは簡単に進入できないような仕組みになっているのです」
と、そこまで言って教授は、ちょっとうつむいた。
「もちろん、連絡に際しては、私からアメリカ政府に「私が教授である」と名乗ってから連絡を取った訳ではありません。私のアドレスに来た無数のメール・・・それこそ無数のメールの中から、私は本物の政府のメールアドレスを探し出し、それから連絡を取ったのです。・・・もちろん、連絡先が、本当に政府なのかどうか、私の方でちょっとした確認はしましたがね」
そこにいた誰も、その「ちょっとした確認」が具体的にどういう風なものであるのかは想像できなかった。
「・・・とはいえ、私がこれ以上、私本人が教授であるというアイデンティファイをしても仕方がないでしょう・・・。何せ、私は名前も写真も非公開。私本人である事を確認してもらう為には、私はまたちょっとした予言を行って、そしてそれが当たる事を見てもらって、それでやっと私自身であると証明される事になるのでしょう・・・。ですが、我々にはもうそんな時間は残されてない」
そう言って教授は自分の、高価そうな腕時計をチラッと眺め見た。
「そう、時間はありませんね・・・もうすぐ・・・・・いや、何でもありません。・・それより、大切な事は、結局大切な事は、いいですがここが大事な点です」
そう言って教授は聴衆に人差し指を突き立てて見せた。
「私が本物かどうか、という点でありません。・・・だって、例え私が偽物で、ただの狂人だ

としても、私はあなた達に危害を加える事は殆ど不可能なのですからね。私はここに来るまでに、みなさんと同様、身体の厳重なチェックを受けました。・・・そしてそこで、私は爆発物や銃器その他を所持していない事が明らかになって初めて、この部屋への入室を許されたのですからね。・・・それに、扉の外には屈強なガードマン・・・それも民間の警備会社ではなく、アメリカ軍の専門のある屈強な兵士達がそれ相応の装備で、我々のガードマンの役を買ってくれているのですよ・・・例え、私が偽物で、あなた達に危害を加えようとしても、結局私には不可能なのです。・・それにもし、私が急に珍妙な・・・まあ、珍妙な話をこれからするんですが、しかし、明らかに常軌を逸した行動をはじめれば、あなた方は扉の外のガードマンを呼べばいい。・・・いや、まあ、恐らくはあなた方がガードマン達を呼ぶ暇も無く、優秀な彼らは私を取り押さえて、私の体を絞め上げるでしょうが」

そう言って、教授は自らの饒舌に体を火照らせてきたかのように会議室の前方部分をぐるぐると歩き始めた。

「そう言う訳でよろしいでしょうか?・・・・ミスター・エルザード?・・あなたの功績は、かねがね聞いております。あなたはいわば、重工業の革新者だ。あなた方の開発した、ダカット鋼は世界中の工業製品に様々な革新を及ぼした。それは恐らく、これから生命工学の分野にも影響を及ぼすでしょう・・・。さて、私のアイデンティティに関してはこれくらいでよろしいでしょうか?・・・ミスター・エルザード?そしてみなさん?」

そう言って教授はぐるりとテーブルに並ぶ人々を見回した後、最後に立ったままのエルザードを見やった。エルザードは、軽く肯こうとしたが、慌てて、その首肯しようとする首を止めておもむろに、振り返り、

「みなさん、この者のアイデンティティに関しては、この方の説明を額面通り受けて、この会議を進行して良いでしょうか?」

と全体に向かって、マイクで呼びかけた。彼はもはや、百五十人近くの代表者のような格好になっていたが、彼のこれまでの経歴やその剛胆な性格、その上持ち合わせている繊細な感覚などを思い合わせれば、会議の出席者の殆どにとっては異論がなかった。

百五十人ほどの人間は皆、黙ってうなずくか、「イエス」と軽く呟くのみで、誰も反論はしなかった。これ以上、この問題を引き延ばしても仕方ない、と彼らの永年の経営感覚や経験が彼らにそう語りかけていたのだった。

「・・・では」

とエルザードはまるで司会を引き受けた人間のように言った。

「もう一つ、聞かせてもらいたい事があります。この会議とは一体、何の為の召集なのでしょうか?・・・その本題は?」

「それは」

とほとんど割り込むような形で教授は言った。

「これから説明します。今から話す、お話の中で。・・・それより、私達には「時間」がないのだ・・・。」

最後の言葉を教授は濁すように言った。

「まずはエルザード様、おかけください。私がまずこの会議・・・会議という形になるかどうか・・・フフ・・・まあ、ともかく・・私が最初に全体的に統括する話をします。・・・そしてそれで、この会合は「お開き」になるでしょう・・・。まあ、１０分か、１５分です。エルザードさんやみなさんが不審になって、私に色々とお聞きになるのはよく分かるのですが・・・まあ、そう「大した」事はありません。少しばかり、私の話を聞いていただいて、そしてその後に「ちょっとした事」があれば、まあ、この会議も終わりです。・・・何、それほど警戒する必要はありません。私には武器なんてないのですから」

そう言って教授は白衣をはだけてひらひらとさせてみせた。白衣の下はありふれたセーターのようなものを着ていた。

「お座りください。エルザードさん」

そう言って、教授は尚も立ち尽くしているエルザードに座るように促した。

「それではみなさん始めましょうか」

そう言って、教授は、さっきまでより少し低い声になって、話し始めた。

*

「みなさん、私はみなさんがもう既に知っておられるように、単なる一介の道化師でしかございません。私は、みなさんのような実世界を多年の努力と克己によって渡ってきた(そうした方々を私の方で選ばせていただいたのですが)、そうした尊敬すべき人々とは全く違った、横合いから顔を出した道化師に他なりません。私の功績と呼べるのは、この狭い地球で起こった二つの大きな事件の予言ですが、それもまた賛嘆すべき仕事と申すことはどうしてもできないでしょう。・・・ですが、我々の人生、並びに人類という一つの喜劇(それとも悲劇でしょうか?)において、私のような道化師が、真面目な方々の思いも寄らぬ真実を口に洩らす、という事も考えられうる、というのが私の考えでございます。・・・ですからみなさま、そのつもりで私の言葉を、半信半疑で良いから、聞いていただければ幸いでございます」

「みなさま、みなさまのような優れた人々ならもう既に気付いておれれるはずと思いますが、ここ二十年、いや、三十年近くに渡って、人類というものは停滞しております。・・・そう一言で申したと言っても、それに対して無数の正当性ある反論ができましょう。・・ですから、私は次の統計的事実を一つ上げさせてもらいたい。即ち二千三十年の現在、人間の死因の内、最も高いパーセンテージを示す死因は「自殺」である、ということ。そしてこの「自殺」はもはや、全体の死因の五割超を示す数字を表しており、なおかつ今も増え続けている事、この事でございます。」

「人類は今から十五年ほど前に、人類にとって最も脅威である様々な病や事故から自らの身を守る為の最良の方法を次々に、様々な天才や人々の尽力により発見し、普及させました。それによって我々はありがたい事に、多くの場合、過去の人々のありかたでは死んでいたに違いないケースでも、我々は死や災厄から免れる事が可能になったのであります。(そしてそれはここに集っておられるみなさん方の尽力がはっきりと効果を示していた、という事実も上げなければなりますまい。)またそれと同時に、延命や健康の増進についても次々に画期的な方法が発明され、そうした事も合わせて、人類全体の平均寿命は飛躍的に伸びました。・・・現代の人々の平均寿命はもはや、男女共に百歳を超えています。・・これは過去には考えられなかった数字です。」

「ですが、そうした成功と裏腹に、人間には一つのジレンマが生まれました。みなさんも知っており、また、日々感じていらっしゃるように、人間にとって最も悪しき敵は人間である、というそうした事態です。・・・かつての人間にとっての最大の敵、自己の内にも外にも潜む自然という奴・・・こやつはもはや、我々の敵ではない。そして代わりに、我々自身が、我々の存在が我々の敵として目の前に立ちはだかってきたのでした。」

「現在の人類の数は最早、百億をゆうに超えています。そしてそれは更に、増え続けています。・・・これには、人類が最早、体内で赤ん坊を育てるより、体外で育てた方がより効率的かつ、安全であるという事に気づき、そうした方法を発展させたという事実もまたこの事に大きく貢献しています。そうして人類は増えすぎました。あらゆる場所、あらゆる世界に人間はい

ます。人間は、もはや人間にとってもっともうんざりする存在なのです・・・。何故かと言えば、もしこの多数の群れのような各人が互いに自分自身の権利を主張するならば、それはお互いの権利を食い合って始めて成立する類の権利だからです。誰しも、自分の権利を主張しようとするなら、そこに立ちはだかるのは隣人、つまり一般化された人間という奴です。人間にとって、人間はもはや最も、邪魔な存在なのです。」

「もし神ならば、こう言うのかもしれない。「人間という奴はもはや限界に達した。お互いの身を食い合わなければ存在できないような輩など、私の創造物にふさわしくない。消してしまおう・・・」と。そして、もはや、その時が来ているのではないか?・・・それが、今なのではないか?・・・と。」

「そして、例え神が我々を消してしまわずとも、結局は同じ事です・・・我々は。結局、我々は互いの身を食い合う身なのですから・・・そう、事態はそこまで来ているのです。みなさんはどうお考えでしょうか?」

そう言って、教授は会議室の人々の顔をぐるっと眺めやった。人々は突然に答えを求められたので、誰一人それに答える事はできなかったが、すぐにまた教授は自分の話に戻った。

「現在、みなさんも知っている通り、様々な所で、人間の凶悪化、これまでに見られなかった凶悪な犯罪、テロ、といったものが相次いでいます。それまで何の問題もないと見られていた一般的市民が、ほんの些細なきっかけ・・・ほんの取るに足らない事で殺人を犯したりします。・・・逆に言えば、殺人の危険水域が下がった、つまり、現在、人を一人も殺していない非常に多くの人の中にも、殺人願望が詰まっていると考えていいでしょう。こうした殺人の殆どは、「動機なき殺人」という奴です。・・・つまり、どういうことか、おわかりでしょうか?・・・我々は存在の次元に渡って、他人を殺す衝動を抱えているのです。・・・もう「限界」という奴です。・・・おわかりでしょうか?・・・人間にとって、他人という奴ほど厄介なものはいないのですよ・・・そしてそれはただ忌まわしいというだけでなく、それぞれの殺人願望の対象となっている。我々は互いを殺す事を目的として生きているようなものなのですよ・・・そう、つまり、人間として生きる事は殺す事なのです、もはや・・・・。そうして先ほどあげた死因のトップの「自殺」も同じ事です。「自殺」という奴は、結局、最初の他者である自分を殺す事に他なりませんから」

そう言って、教授は先ほどと違った、真剣な、キラキラした目つきで会場中をにらみつけ回した。

「・・・そして、そうした殺人願望、存在の次元に渡った自己ないし他者への抹殺願望が集団的に現れれば、それはテロや、大がかりな集団犯罪や、さらには戦争というものになってきます。・・・しかし、戦争をして、人口を目減りさせた所で、もう遅いのです。人間は、人間というものの本性の限界に達したのですから。・・・もし人類がまた最初の一人に戻ったら、おそらくまた歴史を繰り返し、そうして私達のような互いを忌み嫌う存在になる事は必然です。わかりきった事です。・・・それはあなたがたがやっている科学的実験と全く同じ事です。地球という、ほんの小さな実験場で繰り返す再現可能な、ごく小さな実験なのですよ・・・フフ・・・」

　そう言って教授は口の端を、胸ポケットから出したハンカチで軽く拭ってから、また話し始めた。
　「また同じ事ですが、別の観点からもそうです。・・・つまり、経済的観点から、という奴です。・・・みなさんが好きな奴・・・フフ・・・そうです、我々はそうした立場でも限界に達しました。人間の限界に」
　そこで教授は一拍置いた。
　「いいですか?我々はこの地球の資源をもう使い果たそうとしています。・・・石油は、もうすぐ空っぽになります。天然ガスはどうでしょう?・・・いずれにしろ、我々が考えていた以上のスピードで、我々はこの地球の資源を使い尽くす事になりそうです。・・・我々の計算は甘かった。今や、様々な物が足りない。まず、住む土地がなくなってきている。土壌汚染などの問題も深刻です。・・・また、水や食料の問題はどうでしょう?・・・我々の中で快適な生活を送れる者はどんどん少なくなっている・・・その結果、我々はこの観点からでも、もはやあのお馴染みのゼロサムゲーム、パイの食い合いに陥っているのです。こうした観点からでも・・・そして間違いなく言える事は、パイの食い合いはやがて、人間同士の食い合いに発展するだろう・・・という事です。何せ、人間にとって最も邪魔なのは人間ですからね・・・この観点から
でも・・・・・」
　「さて、みなさんはどうでしょう?・・・最後の人間になる事をご所望か?・・・お望みになれば、この地球というちっぽけな星・・・つまり、このゆっくりと沈んでゆく船の上で、他人を蹴落として自分が最後に沈む者になれます。人間は自然が、神が与えた様々なものを犠牲にして、自分達の生を成り立たせてきた。動物を殺し、自分達の都合の良いように飼育し、植物を刈り取り、海や大地から様々なものをくすね取って・・・そして人間は人間を奴隷としていいように扱って、そして我々の生活を、快楽を成り立たせてきた。しかし、今や、それもそれ自体の限界に達した。みなさん方にもう一度お聞きする。あなた方は他人を蹴落として、この地球の最後の一人になりたいか?・・・そして最後の一人とは幸福であるか?」
　教授の最後の言葉はもはや叫び声に近くなっていた。
　「いいですか?・・・みなさん、もうこんな醜い劇はやめようではありませんか?・・・そうでしょう?・・・もう、このパーティーは、この人間の人間による劇は、「お開き」です。・・・そう、そして、その為に、最後の説明責任の為に、この世界では端の存在を演じていた私に、最後に劇のスポットライトが当たったのです」
　「みなさん、どうして私があんな予言を行ったと思いますか?・・・一体、何のためにあんな滑稽なことを?・・道化師の役割を演じるため?・・違う。私は、今日のこの日のために、数年前から準備していたのですよ。そしてあの「予言」は今日の日のための、大がかりな仕掛けのようなものでした・・・そうでもしないと、この全世界の支配者とも言える、優秀なあなた方を一つ所に呼び止める事はできませんからね」
　「私の言っている事は滑稽に聞こえるかもしれませんが・・・まあいい。私はね、みなさん、こうです。私は、創造者として、みなさんに、この劇の、人類という一種の滑稽芝居の幕引きをするに際してですね、最後の説明責任者として現れたものです。みなさん・・・私は実はみなさ

んが思っているよりも、至って真面目な性格でしてね。私は人類というみなさんに対して、いわば、「作り出した者」として、最後の、こうした茶番劇を終わらせる為の最終責任を感じたのですよ。だからこそ、ここにいるのです・・・。私は至って、真面目な性格でしてね」

そう言って教授はメガネを人差し指で鼻にかけ直した。

「そして私は丁度今、みなさん方という素晴らしい、私の選んだ人類の代表者達に対する最終説明の責任を果たし終えました。全ては今、私が言った通りです・・・簡易的な説明で申し訳ありませんでしたがね・・・まあ、いいでしょう。ですが、みなさんは人類が今終わるからといって何も気に病む事は一切ありません。この宇宙でも、地球というコロニーに入れられた人類という一種の微生物の実験は、この世界よりももっと無数ある世界の中でも、有益な方でした。そう、そこではたくさんのおもしろい見物がみれましたしね。巨大な戦争があり、殺し合いがあり、独裁支配や破滅への望みや仲間内での殺し合いや裏切り、そんな事は絶対に考えられないとあなた方が考えていた事が起こったりもしました。・・そして何より、良い面、有益な面もたくさん見られました。ラファエロ、シェークスピア、ゲーテ、ソクラテス、ナポレオンに、フリードリヒ大王や、孔子・・・といった偉大な人物達・・・彼らは人類を超越していたといっても良いでしょう・・・彼らの魂は、おそらくはもはや人類という枠に留まらず、「次」に行くのでしょうね・・・」

そう言って、教授は机の上に載ったペットボトルを開けて、喉を潤した。

「・・・ふう。・・ですが、もちろん、偉大なものはそうしたものだけではありません。偉大な人物だけではなく、たとえば、美しい建造物、人間の手によって大がかりに作られた様々なインフラ、運河だとか、このビルディングだとか、また古代都市やストーンヘンジだとか・・・そういったものもまた偉大なものです。ひいては、偉大な一つの文明や、一つの考えに統率された一つの偉大な集団などといったものもあります。集団全体、人々全体が偉大でありうる事もあった・・・今や、我々にとって遠い記憶ですが・・・。そして、もちろんその逆もあります」

「この世界を見てください。」

そう言って教授は窓の外を指差した。

「この世界は、このように、人間が造ったありとあらゆるもので満ちあふれています。・・・それは目に見えるものだけではありません。・・・目に見えない所で、様々な光線や電波といった、人間が造ったものが溢れています。この空でさえも、人間にとっては、見えない境界で区切られているのです・・・その境界を鳥達は易々と越えていきますが」

そう言って教授は今度は空の方角を指差した。

「そして、今この瞬間も、無数に繁茂した百億以上の人間が、悲喜こもごも、様々なくだらぬ考えや妄想に囚われたり、あるいは偉大な、崇高な使命を自ら感じて行動したりしております・・。そしてそうした百億もの人々全体が一つになった意志が、この世界を決定しています。・・・もうこの世界全体と人間はイコールと考えて良いでしょう。そして、それが今、丁度この今、終わるのです・・・・・」

そう言って教授は薄気味悪い笑みを洩らした。

「ですが、先ほど言った通りに、我々はそれを遺憾に思う必要はありません。我々はさっき言った通り、偉大な様々なものを、様々な事物や様々な人物を生み出した。・・・それだけで、良しとしようではありませんか?・・・みなさん、人類を一つの生命、一人の人間と考えてご覧なさい。・・・それは良い時期もあれば、悪い時期もあった。そして今や、年老いて、その生命を全うしようとしている。最後の命を燃やし尽くし、臨終の床につこうとしている・・・我々は死にたくない!などと喚くよりも、むしろ、かつての良かった日々、優れた事績や人々を生み出し、輩出した事を快く思ってこの臨終の床で安らかに眠りにつこうではありませんか・・・・そうです・・・我々の「人生」はそれほど悪いものではなかった・・・・・それが今終わる・・・」

教授がそう言い終わった時、百五十人の前に置かれている、それまでスクリーンセーバーを映し出していたモニターの画面が突然切り替わり、それはどこかのビルディングが立ち並んでいる風景へと変貌した。・・だが、その事に気付いた人は百五十人の内、十人ほどだった。多くの人が、教授の方を向いていたからだ。

「みなさん、これで私の話は終わりです。・・・・・丁度、時間ですね・・・ほら、みなさん、グランド・フィナーレです・・・」

そう言って、教授は会議室の大きな窓の前に立った。そこからは眼下の風景が一望できる。そしてその風景は今、それぞれのモニターに映し出された風景と同一だった。(僅かに視点が違っていたが)

・・・この会議室に集った、百五十人ほどの人間はみんな、教授が唐突に奇妙な「人類の終わり」などといった話を始め、そしてその話を不意に打ち切った為に困惑していた。彼らは何か、自分達が奇妙なマジックにかかったような気がしていたのだった。彼らが、あと一分、いや、あと三十秒もすれば、静かな、だが彼らの威厳にふさわしい怒りがやってきて、それをこの滑稽な劇の首謀者である教授に向けるであろう事はもはや、明白だった。

だが、その怒りがやってくる前に再び教授が口を開いた。

「ごらんなさい。窓の外を。」

そう言って教授は指差した。

「来ました」

教授の指差した窓の外には、はじめ、何も見えなかった。教授に比較的、近い位置を占めていた十人ほどは仕方なさそうに教授の指差す先を見ていたが、そこには何も変わったものは見て取れなかった。・・・そしてその内、先ほど、代表に立って教授と受け答えしたエルザードが、教授に対して不服と反抗の言葉を述べようとした時、教授の指した指の先に、何か茶色のものが煌めいた。・・・そして、それは少しずつ大きくなっているようだった。

その様子は、それぞれの人間の前に設置されているモニターでも見て取る事が可能だった。「窓から見られない人は、目の前のモニターで見てください」と教授はきわめて冷静な言葉を言った。人々はこれまた、仕方なさそうにモニターに目をみやった。そこには確かに、土色の小さな壁のようなものが、風景の奥からこちら側にやってきているようだった。

「一体、これは何の茶番だね?」

と、テーブルの真ん中当たりに席を占めていた、イギリスから来た財務大臣が声を張り上げた

。だが、その声は、次の大きな音でかき消された。会議室のドアが外から、誰かによって二度思い切り強く叩かれたのだった。
「みなさん!」
とその声は言った。・・・それは、ドアの前に張っていたあの屈強なガードマンのようだった。
「逃げてください!何ものかがやってきます!!・・・黒い、壁のようなものです!!」
そう言うガードマンが何故、扉を開いて、人々を逃げ出せるようにしないのかは、混乱した人々の頭にも、ふとよぎった疑問だった。だが、それに対する答えは、ガードマンの次の声で氷解した。
「みなさん、中から扉を開けてください!・・・何故か、扉が開かないのです!」
その声に、後方の席にいたまだ若年の巨大インターネットサービスの創始者の男性が、飛び跳ねたように立ち上がり、会議室の扉の前に躍り出た。・・・だが、彼は困惑した。扉には内側からかける鍵など付いていなかった。・・彼はすぐに、扉を中から思い切り押したが、扉はピクリとも動かなかった。
「みなさん、落ち着いてください」
と教授のダークな声が、何故か上から降ってくるように聞こえた。
「みなさん、落ち着いてください。みなさんにはこの特等席から、この素晴らしい様子を見てもらうために、ドアの方にはちょっとした細工を仕掛けさせてもらいました。・・みなさん、落ち着いてください。どうせ、逃げきれないのですよ。この地球上のどこにいたって、「あれ」からは逃げきれんのです・・・。ですから、逃げようとしたって同じ事です。みんな死にます。人類は終わりです。ですから、みなさん、落ち着いて眺めましょう。人類の終わりを。私達の最期を。この特等席で」
そう言って教授は大袈裟に、窓の前に立って両手を高々と掲げた。・・・だが、誰もそんな様子は気にしていなかったし、見ていなかった。みんな、開かない扉の事で手一杯だったのだ。・・・彼らは何人か力のありそうな者が結託して、一斉に扉を押したりしたが、扉はやはりピクリともしなかった。
その間にも、謎の茶色の壁は遠くからこちらに迫ってきた。それは少しずつ少しずつ大きくなって風景を捉えていった。それは、初めに想像されたよりももっと巨大な、あるいはそんな想像など吹き飛ぶくらいとてつもなく大きいものであるようだった。
だが、そんなことを冷静に考えている人間は(教授を除いて)もはや誰一人もいなかった。みんなが半分、半狂乱であり、てんやわんやになっていた。・・・そしてその内の一人、会議室の前方に座っていた中年の紳士風の男(この男は世界で最も名を知られた優れた芸術家の一人だった)がやにわに立ち上がって、教授に駆け足で詰め寄り、教授の胸ぐらを思い切り掴んだ。
「この小芝居は全部お前の仕業か?・・・今すぐ扉を開けろ!・・・さもないと・・・」
そう言って、男は握り拳を作って、教授の鼻面を思い切り殴るぞ、という威嚇のポーズを見せた。だが、教授はへらへらと笑って、
「どうせ、終わりなんですよ。見て下さい」

そう言って再び窓の方に顔を向けた。「それ」、つまりその土砂の津波のようなものはもう既にこの会議室の方に近づいてきていた。そしてそれは考えられないくらいに大きかった。それはもはや天を覆っていて、その地域一体を暗くしているようだった。そんな大きな津波は誰も見た事がなかったし、もちろん一度も観測されたことのないものだった。

そして会議室には地響きのようなものが鳴り始めていた。それは、窓の外かモニターを一度も見ていない(そして眼前の光景が信じられない)多くの人にとっては、何か巨大な地震が起こっているように感じられた。だがその地鳴りはあの津波のようなものから発せられ、地面を揺るがせて、この高層ビルディングにまで伝わってきているのだった。

「土砂の津波だ。あれで終わりだ」

と教授は不適な笑みを浮かべたまま言った。

「扉を開けろ!今すぐ!」

と芸術家の男性は本気で怒鳴った。・・・実は彼は、教授の言葉に釣られて窓の外を見たとき、言いようのない絶望感と、彼の持ち前の直観力により、「ああ、もう自分は死ぬのだな」という諦念のようなものが芽生えていた。それほど、あの巨大な津波は急速にこちら側に次第に大きくなって、向かってきたのだった。・・・それでも、この芸術家は、自分が何かをやらねばならないと感じていたし、恐怖におののいてへたれこむような人物でもなかったため、さし当たってやらなければならないと感じる、扉の解放を要求したのだった。

それでも教授はへらへらと笑いながら「もう終わりですよ。この特等席で、最高の見物を眺めようじゃありませんか?・・・あの栄えた、恐竜達もやはりこんな風に同じように死んだのです」と、さっきと同様の言葉を繰り返していただけだった。

芸術家の男性は「クソッ!」と言い捨てて、胸ぐらを掴んでいた教授を突き飛ばして解放し、後ろで扉を開けようと必死に活動している人々の群れの元に走っていった。

そうこうする内にも、あの土の津波(それはもはやはっきりと認識できるくらい大きくなっていた)はどんどん近づいて、大きくなっていた。・・・それは今や、はっきりと、このビルディングよりも遙かに高い大きさである事が分かった。それは、この土の津波がもはやこのビルディングを巻き込もうとして、太陽の光さえも遮って、会議室全体をまるで夜のように暗くしていたからだった。

人々はパニックだった。そしてもう、扉の外からガードマンの声は聞こえなかった。ガードマンももはや逃げたのかもしれなかった。・・・もっとも、人々は必死だったので、そんな事には少しも気付かず、思い当たりもしなかった。

今や、土砂の津波ーーーどこから発生したのか、全く未知の土砂の津波は、この会議場を、そしてこのビルディングを包もうとしていた。それを見ていた人もいたし、ドアを開けるのに夢中になっていた人も多数いた。・・・だが、その中で、一人、教授が、もはやマイクの力を使ったとは思えない不思議な声で、このビルディング全体に(いや、それは世界中に聞こえたのかもしれない・・・)呼びかけた。

「みなさん、最高のフィナーレです!人類の終焉です!・・・アディオス!!」

とその不思議なスペイン語の挨拶と共に、ビルディングは土の津波に覆われ、そして上から無

数の土砂が降り注ぎ、ビルディングを押し潰した。それは何十分間も続き、その津波が去った後にはビルディングはもちろん、人間が足跡を残したものはほとんど何一つ残っていなかった。

　そして、言うまでもない事だが、この津波は世界中を駆けめぐった。この、どこから発生したのか分からない、世界最高峰のビルよりも、更に直径が高い土の津波は、全てを無慈悲に破壊し尽くした。どんなヒーローも救世主も現れず、それらは人々に速報でニュースで伝わったものの、ニュースで伝わった所で、人間にはどんな救済方法も残されておらず、人々はただただ自分達の都市が順番に潰され、自らが死んでいくのを待つしかなかった。様々な言葉、暴力が津波が襲う前に世界各地で吹き荒れたが、それはあの巨大な津波の前では全くの無意味だった。・・・人々、人類とその従属物ともいえる様々な生命は順番に死んでいった。土砂の津波は、少しも威力を弱める事なく、世界中を駆け巡り、世界全体を見事なまで破壊し尽くした。

　そしてそれとほぼ同時刻、宇宙で、非常に奇妙な事が起こった。宇宙で人間は、宇宙ステーションと、プロトタイプの宇宙コロニーの二つで、総勢百人ほどの選ばれた人間が作業していたのだが、あの土の津波が起こったのとほぼ同じくらいの時刻に、全く、レーダーにも、地球での観測所でも観測されていなかった、全く未知の隕石がやってきて、丁度、その二つの施設にぶつかり、その二つの施設は破壊され、そこに従事していた百人ほどの人間は全て残らず、宇宙空間の中で死んだのだった・・・。それは正に、神が選んで人間を滅ぼすために送り込んだ隕石のような格好だった。

　こうして人類は死んだ。全ては終わった。地球という四十六億年の歴史を持つ惑星は、まだその外形は留めていたものの、その地表、その地下、その空中、そして海の中で生息する全ての生命体の内生き残ったものはほとんど一匹もないと言っても過言ではなかった。

***

・・・・・・そこはどこだか分からない、小さな小部屋のような場所だ。部屋の中には電気はついておらず、スチール製と思われる机が一つあり、その上には旧式のような見かけのデスクトップパソコンが設置されている。部屋の中は、その画面から発される青い光だけで満たされていた・・・。そしてそのパソコンの前には、一人の、白衣を着た男が椅子に座って、パソコンの画面を見つめていた。

「・・・ふう、危なかったな」

とその男は呟いた。

「もう少し遅れたら、本当に死ぬ所だった。・・・まあ、死んでも大丈夫だが。「俺」はな。」

そう言って、その男はクックックとダークに笑った。・・・・その男はまるで、あの会議室にいたあの教授にそっくりだった。・・・・いや、その口振りや外形は間違いなく、あの男そのものだった。

教授?と思われる男は、パソコンの中の画面をじっと見ている。その画面には、先ほどの土砂の津波が襲った後の大地が映っていた。それは丁度、あの会議室、そしてあのビルディングがあった所だったが、全てが土砂の波と化した今には、その映像でそれがどこか言い当てられる者はもはや一人もいなかったであろう・・・。そして非常に不思議な事には、その画面には非常に印象的な一つの物が映し出されていた。それは、土砂の津波がなみなみと動いているその上をひらひらと舞っている一枚の白衣だった。・・あの会議室が上から土の津波に潰された以上、その白衣が舞う事はどう考えても物理上、不可能なはずの事だった。

「さて」

と教授はその画面を見つめながら言った。

「これで第一章は終わりだな」

そう言って、教授はその画面の右上にある、赤いバツマークをクリックした。すると、映像はかき消えた。

そして教授は、無味乾燥のブルーバックのデスクトップ画面の中から「第二章」と書かれたファイルを選んで、クリックした。すると、ファイルが開き、画面の上には一つの映像が現れた。それにはどこかの銀河系が遠巻きにして映っていた。

「さて、はじめるか」

そう言って、教授はキーボードに手を置いた。

「第二章を」